



TITLE:

<特集にあたって>プラクシス・行動のための知識

AUTHOR(S):

阿部, 健一

CITATION:

阿部, 健一. <特集にあたって>プラクシス・行動のための知識. 地域研究 2011, 11(1): 131-137

ISSUE DATE:

2011-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/251310>

RIGHT:

©地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会 2011

「特集にあたって」

プラクシス・行動のための知識

阿部健一

Ⅰ つなぐという実践

本特集では、地域と地域をどのようにつなぐかを課題としている。つなぐ活動、メディエーション(Mediation)に焦点をあて、地域研究の役割を鮮明にしておくのが目的である。

グローバル化の時代と呼ばれる今日、地域と地域は、日常的な実感としてつながってきている。

たとえばデパートの地下の食品売り場。そこでは世界各地から集まった食材を見ることができ、フードマイレージは、生産地から消費地までの距離

に、食材の重さを使ったもので、食材をどれほど遠くに依存しているのかを現している。日本のフードマイレージは一九九〇年代から年々増加し、今や世界一になっている。今日のわれわれの食卓が、どれほど遠くからの産物によって支えられていることが数値としても示されている。

日常風景の中には、海外からの労働者をごく普通に見かけるようになった。大都市だけでなく、農村でも同様である。ホテルの清掃人、コンビニの店員。閉鎖的といわれた日本の労働市場も、自由化により開かれ、単純労働だけでなく専門知識・技術を伴う多種多様な職種に海外から就労が可能になった。二国間経済連携協定により、フィリピンとインドネシアからの看護師・介護福祉士候補者の受入れが開始

されたことは、大きな話題となった。

日本と世界のほかの地域の相互依存が、もはや元に戻れないほど強まっている事例は、他にもいくらかでもあげることができる。地域と地域は現実にはさまざまなところでつながってきている。そのようなかで、なぜあらためてつながりを取り上げようとしているのか。

それは地域と地域のつながりが、いびつでゆがんだものであり、このままでは地域の健全な自立の妨げとなり、地域の「貧困化」「空洞化」を招くと考えられるからである。

グローバルゼーションは世界に均質化と異質化を同時にもたらしたとするのが一般的である（アパデュライ二〇〇四）。ただしその均質化は、先進国を中心とした国際競争社会の勝者の側のイメージである。

均質化というイメージは、携帯電話、都市景観、マクドナルド、ハリウッド映画や音楽といった世界共通・共時のフローがある、という事実によって支えられている。しかしこうした事実は、現実の、離散的なわずかな断面にすぎない。それを、先進国のメディアが仮想的につなげ、世界が均質化しつつあるというイメージを生み出している。

現実には異質化、というより地域格差はかつてないほど拡がっている。一九九〇年以降、上位20カ国の平均所得は40%増加したにもかかわらず、下位20カ国はほとんど増えていない（ポツゲ二〇〇九）。金持ちはずっと豊かになり、貧者は、たとえば世界の食糧生産が増加しているにもかかわらず、飢えの恐怖に苦しむようになった。

このような状況を目の当たりにして、地域と地域の関係が健全なものであるとは、とても考えられない。

イメージと現実の乖離を糾すのは実践である。つながることによって衰退してゆく地域社会を、つなげることによって豊かにすることができはる。いびつでゆがんだ地域と地域のつながりを健全なものにする。そのような試みは、市民社会という枠組みの中で、数多くある。この特集も、そうした実践の報告のひとつであるが、地域と地域をつなげるうえで、メディアエーションという役割の重要性を、それぞれの立場から強調している。

メディアエーションという言葉には説明が必要だろう。メディアと同じ語源で、一般的には「媒介すること」である。この言葉に、地域研究的意味を付与しておきたい。健全に媒介するためには、つなげた

い地域と地域をそれぞれ理解しておかなければならない、ということである。

これは行為者、媒介する人 Mediator に、「仲人」という訳があてられることがあるのを例にするのが、卑近ではあるがわかりやすい。

異性と出会う機会の少ない結婚適齢期の男女がいる。仲人は小さいときから、男女とも別個に、両親・家庭のことも含めて、よく知っている。よく知っているから、自信をもって間を取り持つことができる。仲人は、出会うことのなかった二人が幸せな家庭を持つきっかけをつくりえる。「出会い系サイト」は、これとはまったく正反対の、メデイエーションを欠いた、短絡的なつながりである。

外部者として、当該地域をもっともよく知る地域研究者は、地域と地域をつなげるときに、すぐれた「仲人」となれるはずである。

メデイエーションに「調停」という意味があることにも触れておきたい。静いや紛争が起きた際に、当事者同士で解決を目指すことと失敗することが多い。それぞれが自分の立場だけから主張をするため、間に第三者を入れると、両者の状況が客観的にわかっていするため、直接やりとりするより、うまくゆくことになる。地域研究者が、地域と地域をつなげ

ることに積極的に介入することの、あえていえば「正当性」も、この辺にある。

「正当性」。ここで、外部者が地域に関わる際の問題点にも触れておくべきだろう。浅慮な関与が悪影響を及ぼすことは残念ながが多い。関与には細心の注意が必要である。

この点で、同じように臨地調査を研究手法とする人類学は長く謙虚であった。透明人間のような存在」を理想とし、地域とそこに暮らす人々を可能な限り客観視するように努めてきた。

しかし、「人間の研究」をうたっている人類学が、民族紛争や環境問題、さらには経済格差といった問題群と現場で対峙するときに、それに無関心ではいられないはずはない。従来通り静かに観察と記録を行いながら、学問的使命として、対処の手立てを模索することになる。

たとえば九〇年代には、開発と人類学的についてしっかりと議論されている（たとえば足立一九九五）。そこでは人類学的知識の有用性を認めながらも、はじめに開発計画・プロジェクトありきという外圧的制約のため、異文化理解が不十分なまま中途半端に関わってしまう弊害も指摘されている。人類学者が「文化の仲介者」としての機能を果

たせず、むしろ「文化の黒幕」や「文化の売人」となってしまう危険性である。

しかしそこで問題なのは、関与という行為ではなく、不十分な理解のまま関与するという行為である。問われるのは、関与のあり方ではなく、学問的成熟度ということである。メデイエーションという実践活動は、地域研究の目的ではなく、精緻な地域理解がなしえうる成果のひとつである。

メデイエーションをさらに説明するには、個別の事例にあたるほうがいい。以下、個々の論文を紹介しながら、地域と地域を健全に結びつけようとする実践活動の際に、つまりメデイエーションの際に、地域研究がどのような役割を果たしえるのか、明らかにしておきたい。

Ⅱ 所収論文について

島上論文は、日本の山村とインドネシアの山村をつなぐ際のメデイエーションについて書かれている。インドネシアの山村の開発、村おこしを目的とした実践の中で、日本の山村と結びつけることを発想するようになる。インドネシアの人が日本から学

ぶことは多い。ただしこの場合、模範例としてではなく、繰り返してはいけない失敗例として、である。

日本の山村は高度成長期から都市への人口の流出が続き、共同体として維持できなくなっている。経済的な豊かさを求めて、多くの人が山村を去ったが、残された人は年を取り田畑は放棄され、森林は荒れ放題である。限界集落という言葉も、語感の非人間性を伴ったまま定着した。

スラウエシ島の最奥からやってきた人は、日本の物質的な豊かさの影の部分を知る。そして、日本の山村の古老から「君たちはわれわれと同じ轍を踏んではいけない」という言葉を聞く。スラウエシの村は、ちょうど五〇年前の高度成長期の日本と同じ発展の開発と時期にある。経済的には大きな格差があるが、今の自分たちの村のほうには、別の豊かさがあることに気づく。島上は今回、映像記録をメデイエーションの実践手段とした。トンプと呼ばれる山村の暮らしを映像で記録することで、「写し鏡」のようにお互いが学びあえると考えている。

島上自身は、インドネシアでの農山村での開発研究の経験は豊富であるが、日本の山村の歴史と今日状況にくわしかつたわけではない。山村交流というメデイエーションをどのように有意義なものにする

のか模索するなかで、逆に別の地域、日本の山村について理解を深めてゆく。そしてそれが、インドネシアの山村の今日的状況を客観的に理解することにつながってゆく。メディアーションと地域研究は、あるいは実践と研究は、表裏一体の関係にある。

人口が少ないから限界集落になるのではない。東南アジアでは、日本の限界集落と同じ人口規模でもコミュニティが生き生きと活動が続けているところはある。日本の社会システムが、都市社会のみを前提としていることが問題の根底にある。石山は、そのうえで、都市と農村をどのように結びつけたらいいのか、考えながら実践活動が続けている。明らかに異邦者とわかる海外での臨地調査よりも、国内での調査の方が、現実の差異が見えにくくなっている点で、むしろ問題が多いかもしれない。

石山論文が導入部で都市と農村をつなげるうえで、グリーン・ツーリズムの重要性を指摘している。それに触発されて、論文の趣旨とは離れるが、ツーリズム、観光というメディアーションについてもここで触れておきたい。

観光は、ある特定の地域を知るもつとも簡便な方法である。簡便ではあるが、その意義は、すぐれたメディアーションがなされることによって、きわめ

て大きいものになる。近年では、かつての発地型から着地型に観光の主体がかわりつつある。観光客相手に小学生がガイドをつとめることで、自分の地域を知ることになる。第三者から指摘されることで、自分の地域の、他の地域にはない良さを再認識することも多い。観光が優れたメディアーションになるのは、地域を外部者が知ったうえで、常に内部者の意見に耳を傾け、さらに理解を深めるという過程の繰り返しによる。つまり地域研究そのものである。

観光が、表面的な理解にとどまらず、短期間で、どこまで本質的な理解につながってゆくか。一時的な観光で農村を訪れた都市居住者が、最終的に農村居住者となり、農村地域の、そして日本全体の、社会システムを変えることにつながるができないか。新たな出会いには、そのような可能性まで秘めている。

さて石山論文に戻ろう。調査者がメディアーターとしての役割を果たせるかどうかは、どこまで地域に受け入れられるかどうかと重なるところがある。「ムラ入り」という言い方をしているが、その作法、調査者が地域に居場所を見つける方法、についての論文である。石山は、日本の国内の調査経験を生かして、現在は再び乾燥アフリカ地域で研究を行うよ

うになっている。「地域に没入するだけでなく、いったん受け入れられた地域から外に向かって声をあげてゆく」。NGOとしてアフリカに関わった経験を経て地域研究を行っている石山ならではの発言である。

北田論文は、国際協力の現場における研修事業をとりあげている。日本の、途上国から研修生を招いての研修事業は、残念なことに、多くの場合単なる物見遊山に終わってしまうことが多い。原因はメデイエーションが不十分だからだ。北田は、インドネシアの議員研修事業に関わりながら、効果的な事業のあり方を考えている。

途上国といっても、地域の歴史・文化・経済・政治的状况はさまざまである。研修の目的・方法も、当然異なってくる。研修者が何をのぞんでいるのか、事前に十分把握しておく必要がある。そのうえで重要なのは受け入れ側への説明である。北田によれば、研修事業の効果は、たんに研修者だけでなく研修を受け入れた側によっても評価されなければならない。すぐれたメデイエーションは、両者がともによかった、と思える結果を導く。この点は、島上の山村交流においても指摘されている。地域と地域を、どちらも豊かになるように結びつけることが、

メデイエーションである。

北田自身は、地域研究者ではなく通訳という立場で、地域と地域をつなぐ事業に携わってきた。その実践活動の中で、すぐれた地域研究の成果が、この場合インドネシア議会政治についての情報の蓄積と理解が、不可欠であることを指摘している。

III 地域研究と実践

地域研究の知識と経験を実践活動に活かそうという研究者は着実に増えている。身近でも、主に東南アジア地域研究に携わった地域研究の第一世代の研究者が、定年により大学などの研究・教育機関を離れたのを機に、NPO法人「平和環境もやいネット」(<http://moyainet.com/>)を立ち上げ、関わりの深い地域で実践活動を行い始めた。地域研究の外延としての活動である。

ここで紹介したいのは、むしろ地域研究の中に内包される実践活動についてである。そのような例として、「アフリック・アフリカ」(<http://africa-vine.jp>)を紹介しておこう。これからの地域研究を担う若いアフリカ地域研究者が立ち上げたNP

〇組織であり、アフリカのことを日本へ、日本のことをアフリカへ伝えることが目的である。

グローバルな時代、世界各地の映像が、瞬時にわれわれの生活の場に飛び込んでくる。湾岸戦争時の戦場報道は、大きな転換期だろう。今ではたとえば You・Tube で、世界の誰か知らない人の撮影したどこか知らない場所の映像が簡単に入手できる。「情報の時代」と呼ばれる。ユビキタス社会が現実味を帯びて語られるようになってきた。通信技術の発展のおかげで、最新の「情報」が大量にリアル・タイムで入手できる。過剰な情報の中で、われわれはよその地域を知っているように錯覚する。

アフリカもむろん例外ではない。むしろアフリカの場合、飢餓、紛争、貧困といった情報のみがあふれ、ステレオタイプなイメージが定着しつつある。

飢餓も紛争も貧困も事実である。しかし、その背景にある社会的・経済的・歴史的・政治的背景について、くわしく正確に解説した情報へのアクセスは限られている。メディアーションとメディアはいうまでもなく語源を一にしている。

地域研究者は論文や報告書を書くだけでなく、さまざまな形で社会に還元できるだろう。それを多様な角度で実践しようとするプラットフォームがアフ

リック・アフリカである。最後に、強調しておきたいのは、こうした実践活動は、地域研究者個人の行為と経験に閉じ込めておく必要はないということである。実践は、地域研究という学問へフィードバックされるはずである。実践活動の中から、国際協力学など他分野との協働との可能性が生まれ、たとえば実践型地域研究という地域研究のあらたな水平へと超越できる可能性は高い。プラクシス (Praxis) としての地域研究。地域研究の訴求する知識は、事実を明らかにするための知識でも知識のための知識でもない、行動のための知識でなかるうか。

●参考文献

足立明 (一九九五) 「開発現象と人類学」米山俊直編『現代人類学を学ぶ人のために』世界思想社。

アパデュライ、アルジュン (二〇〇四) 『さまよえる近代』

門田健一訳、平凡社。

阿部健一 (二〇〇七) 「小さな国」東ティモールの大きな資源——みんなで考えるコーヒー豆の活かし方」加藤剛編著『国境を越えた村おこし』N T T 出版。

ボッケ、トマス (二〇一〇) 『なぜ遠くの貧しい人への義務があるのか』立石真也訳、生活書院。

(あべ・けんいち／総合地球環境学研究所)